起上小法師畫集第二集解說

第四圖

(一)(二)(三)　靜岡の達磨（張子製）　一月二日初買の時之れを神棚に祀り、吉事あれば眼睛を點ず。久能山東照宮參禮日（一月十七日）にも同所露店にて商ふ。此外鈴川の毘沙門天（舊正月八日）及び島田の十日戎の緣日にも盛に賣り出す。眉鬚などの模模化せる奇形と、衣の襞を黄色に彩れるとは靜岡達磨の特徴なり。

(四)(五)(六)　濱松の達磨（張子製）　(四)は一月二十八日市内秋葉山神社祭日に境内にて立並べる露店商人より買ひ求め、片目だけ眼睛を點じ、金が儲かればもう一つ入れてあげると約し、願叶へば之れを履行したる上、川へ流すか、又は翌年一月十五日同社内にて注連などゝ共に燒く。(五)(六)共に珍物なれど、今は共に絶種となれり。

(七)　沼津の達磨（張子製）　今は無し。されど毎年正月には市中又は前記毘沙門天緣日にて靜岡達磨を買ひ求め、緣起棚に祀る風習今も猶存す。興津邊にても同樣なり。

(八)　三島の達磨（張子製）　之れも今は無し。圖は皆實物より僅に小なり。

第五圖

(一)(二)(三)　山形の達磨（張子製）　製法叮嚀なり　大なるは實船牡丹花などにて衣部を彩る。眉鬚の模模化せるは、仙臺福島邊のものよりも、寧ろ豐岡達磨に類す。(三)の青眼なるは第二圖に示せる福島製小達磨に似通へり。

(四)　同　右（練物）　起上りの實なく、本來坐禪達磨なれども、甚しく人形化し、起上小法師との中間物として面白し。

(五)　弘前の達磨（土人形）　顔面に滑稽味あり。底は紙一枚にして黑く塗れり。

(六)　弘前の達磨笛（土製）　之れを人形笛とも云ふ、人物動物等種類多し、圖はいづれも實物より稍小なり。

第六圖

(一)(二)(三)(四)(五)　博多の達磨（張子製）　(一)(二)は女達磨にて普通品なり。(二)は太宰府天滿宮其他にて年中賣り居れり。(三)(四)(五)は稍古製に屬し、今は少し。毎年大晦日に、「起上り〳〵起上つてころ―ですき―がれ」又は「起上りや〳〵昨夜生れた起上りや」と唱ひつゝ市中を行商す。すき―がれは直ぐ起上れの訛なるべし。買手は五六個を轉がし見て、最早く起上りたるを購ひ神棚に祀る。八九月頃には筑前及對馬の海岸より船頭の來りて買ふもの多し。起上りを浮上りに通はせて船の神樣として祀るなり。大阪又は名古屋製の鉢卷達磨は年中玩具店を賑はせど、正月には賣れぬ由、鉢卷して越年するは不吉なりとの迷信による。圖はいづれも實物より稍小なり。

附記、起上小法師の小法師は、足利時代に菩が子の、こを卑下して云へる小法師と同義なるべし。（柳亭種彦の隨筆「用捨箱」參照のこと）

大正十三年六月

木戸忠太郎記

大正
13.7 16
内交

大正
18.7.18
内交

寶

壽